論説

炭焼小五郎と真名野長者

―「宇佐大神氏進出説」批判(4)―

松岡実

一　はじめに
二　炭焼小五郎・真名野長者伝説（説話）について
三　幸若舞曲『烏帽子折』と『長者由来記』の分析
四　真名野長者創建寺院踏査記
　―蓮城寺・満月寺・般若寺・太山寺―
五　もう一人の炭焼小五郎「疋野長者」
六　坂門津と三重駅・丹生駅
　―大野川国衙領ルート―
七　中世芸能伝播者の拠点
　―願行寺（高瀬津）と西教寺（坂の市）―
八　まとめ

一　はじめに

さいきん、大野川流域の風物や、歴史・仏教遺跡等が、にわかに脚光をあびてきて、今では定期観光バスまで登場する時代となった。こうした状況の中で私の念願とする豊後大神氏のルーツ解明もさること乍ら、今一つ忘れてならないのは、この地方を舞台にくり広げられた古代のロマン、全国の長者伝説の代表格である〝炭焼小五郎〟と〝真名野長者〟の伝説（説話）の存在であろう。この問題もその背景に流れるのは豊後大神氏であり、さらに本誌、一一六号「日羅の研究」でも述べた肥後、豊後、瀬戸内海、難波と直結した文化、経済ルート上の所産であることを私は信じて疑わない。今回は民俗学の立場からこの〝幻の長者〟をとらえ、私の所説〝「宇佐大神氏進出説」批判〟の補強としたい。

二　炭焼小五郎・真名野長者伝説（説話）について

炭焼小五郎と真名野長者伝説（説話）については、古くから多くの人々によって著書や論文が発表されてきたが、今だにその結論がでていないのが現状である。そこでまず最初にその代表的な所論について検討を試みたい。

△柳田国男氏『海南小記』「炭焼小五郎が事」

柳田国男氏が炭焼小五郎に注目されたのは、大正十年一月、朝日新聞に七回に亘って連載した「炭焼小五郎譚」だが、これは海南小記に「炭焼小五郎が事」として納められている。『定本柳田国男集』第一巻（筑摩書房）からその大要を抽出してみる。

まず柳田氏は冒頭で、豊後は炭焼の本国であり、その中心が、臼杵深田と三重内山で、宇佐地方では炭のことをイモジと呼ぶから、宇佐信仰の発祥とも関係があることを示唆されている。次いで炭焼長者伝説にふれ、

(1)山中で貧しい若者が炭を焼いていた。豊後では男の名を小五郎と言う。

(2)都から貴族の娘が観世音のお告げに由って、逐々と押掛け嫁にやって来る。姫の名は玉世か玉屋か必ず玉の名がついて

いる。容貌が醜いか、或は痣があるというのは後の説明かと思われる。

(3)炭焼は花嫁から、小判又は砂金を貰って、市に買物に行く途すがら、水鳥を見つけてそれに黄金を投げつける。それがこの物語の一つの山である。鳥は鴛鴦(おしどり)、鴨、鷺、鶴等必ず水鳥で、その場所の池又は淵が、故跡となって残っている。

(4)何故大切な黄金を投げすてたかと戒められると、あれが其の様な宝であるか。「あんな小石が宝になれば、わしが炭焼く谷戸に、およそ小笊で山ほど御座る」といって、それを拾って来てすぐにするすると長者になってしまう。

以上の四項を四つの要点として掲げている。この四つの内、少くとも三つまでを具備した話が、北は津軽から、南は沖縄の宮古島まで流布している。ここで柳田氏は極めて重大な指摘をされるのである。それは真野長者、あるいは万之長者の栄華の物語は中世民間文学の真只中にあって豊後の物語として定着して終っているが、その出世の始を語った炭焼婚姻の一条は必ずしも豊後の出来事に限られていない事である。例えば津軽伯爵家の系図の中に、第四代左衛門尉藤太として編入され、炭焼婚姻の四つの要点を満たし、後に近衛殿の女福姫と結ばれていること。一方では金売吉次が突進して、吉次兄弟は炭焼藤太の子供という伝承が東北全般に及んでいる事を挙げている。

さらに幸若舞『烏帽子折』の中、美濃の青墓の遊女の長が語った山路(さんろ)の牛飼いの一段を、文字として伝った最も古い真野長者であろうと述べ、物語りに用明天皇の出現の理由は、「生れたまう御子が仏法最初の保護者、聖徳太子であったと謂はんが為」と述べているのに注目したい。

柳田氏は引続いて全国各地の炭焼長者の伝承を掲げて、その中で鍛冶の神としての宇佐八幡を強調し、「炭焼小五郎の物語の起原が、宇佐の大神の最も古い神話であったと仮定し、「炭焼長者が豊後で生れ、後に全国の旅をして、多くの田舎に假の遺跡を留めて置いてくれなかったら、濁り八幡神社の今日の盛況の根本の理由が説明し難くなるのみでなく、我々の高祖の火の哲学は、永遠の不明に帰してしまったかも知れない。」と結論づけている。

△伊東東氏『内山観音雑考』

故伊東東氏は、石仏と号し、三重町に在住された碩学で、内山蓮城寺の研究の第一人者であった。その研究の一端が故土生米作氏のご尽力で『内山観音雑考』としてまとめられているが、これには傾聴に価するものがあるので次に紹介したい。

伊東氏は、筑後柳川の立花家所蔵の文書をはじめ、確実な史料や金石文を引用してまとめられており、史料的価値はきわめて高い。結論的には、元徳三年の文書が蓮城寺開基に関する最も古い記録とし、敏達天皇十二年日羅建立説と共に、推古天皇二年聖徳太子建立説も紹介されている。真名野長者伝説については、その完成を江戸初期に比定し、単純な炭焼伝説に、草刈氏の所伝が混入して、用明天皇の故事を織込み、さらに、深田満月寺、伊予の太山寺、周防の般若寺まで採入れたが、その骨子には柳田氏と同様『鳥帽子折』の影響も考えておられるようである。また宇佐八幡との関係も支持されてはいるが、反面物語りそのものは宗教上、芸能上の所産であって、歴史的にはその実在を否定されている。ただ『続日本後記』（第十九）の豊後権守、登美真名が叛いた記事をとりあげ、真名が用明天皇の皇胤であり、長者の子孫と称する草刈氏もまた用明天皇の苗裔との家譜を持つ事から両者の関連を示唆されているが、この件は史料の『続日本後記』及び『新撰姓氏録』「左京皇別」共に「登美真人直名」であり、その関連づけは無理であるようである。

△橋本操六氏「炭焼小五郎は実在しなかった」

昭和五三年三月、臼杵市教育委員会では、『臼杵石仏地域の民俗』を発刊したが、その中に一章をとって、「炭焼小五郎の史実と伝説」にあてた。そしてそのIを担当したのが、橋本操六氏で〝炭焼小五郎は実在しなかった〟と表題をかかげ、否定的立場をとられている。その要旨は、まず中野幡能氏の舟（丹）生津留畠の臼杵深田説を理論的に否定し、さらには、

「大神氏が豊後に土着するのは、宇佐大宮司職をめぐる大神・宇佐両氏の争いによるものでなく、大神氏が宇佐に入るのと同時に豊後にも大神の一族が入ったとみるべきではなかろうか。」

と中野氏の宇佐大神氏進出説に否定的見解を示されている。さらに丹生、姫岳、火振り、犬養の解釈を通じ、満月寺が創建される以前に、丹生採取一族の手になる観音寺の建立を推測し、その裏付として「豊後国三重郷蓮城寺院主職証文案」「三聖

寺嘉祥庵主処英紛失状案」（『大友文書＝大分県史料二六巻』）によって、文治四年（一一八八）から元徳三年（一三三〇）まで〝内山寺〟。元弘三年（一三三三）を区切りとして〝連城寺〟に寺号が変化したことを指摘され、元徳三年の史料には「爰彼寺者、日羅上人建立往古之寺也」とし、蓮城寺は元弘三年以後の呼称であることを主張され、さらには、明治三年の神社控帳によって、蓮城寺境内、釈迦堂を満月寺古跡とする伝承のあったことに注目されている。次に室町時代の『鳥帽子折』から、明治二十年の『真野長者由来記』までの史料六点を検討し、満月寺の名が世に出るのは、江戸中期であるとし、従って〝長者小五郎は『鳥帽子折』の「まのどの」に起因した創造の人物〟であると結論づけて実在性を否定されている。また蓮城寺も、鎌倉時代には内山寺で、日羅上人を開基とすることから、蓮城開基説も否定されている。

△大波多海氏「炭焼小五郎は実在している」

前書Ⅱを担当された大波多氏は実在説をとられるが、その要旨はまず(1)長者伝説の概要から、(2)伝説の真憑性と続くが、ここでは幸若舞『鳥帽子折』を引用して、真名野長者は大神系臼杵氏がふさわしい人物と推定されている。(3)では臼杵氏（長者）の経済的財源を水銀採取に求められて、深田地区内にその例証をあげ、「全国に類似する多くの炭焼小五郎伝説は丹生一族の移住の結果」と論じている。ついで地名と遺跡から満月寺の実在性を強調し、さらに周防般若寺、太山寺と共に草刈家の子孫にまで筆が及んでいるが、炭焼小五郎、真名野長者伝説は全て臼杵深田の出来事にあるとされ、三重内山の事蹟には一切ふれられていない。

三　幸若舞曲『烏帽子折』『真名野長者由来記』の分析

前章で四先学の論文をみてきたが、その共通点は、この伝説（説話）が初めて文字に現われたのは、室町期の成立とされる幸若舞曲『烏帽子折』であり、その影響を強く受けているという点にある。それを解明するためには、先ず幸若舞を知ることが第一であろう。『芸能辞典』（幸若舞）の項によると、

「簡単な舞をともない、説話的戯曲を語る一種の語り物で、かつては能楽に吸収された曲舞（くせまい）の一流とされ、舞々（まいまい）ともよばれていた。室町時代に、桃井幸若丸直詮（おなあきら）が草紙『八島の軍』に節づけしてうたったのがそのおこりとされる。織田信長ら戦国の武将に愛され、江戸時代には将軍の庇護を受けた幸若丸の子孫がその芸を伝承していたが、明治維新以後、正流は滅び、余流が各地におもかげをとどめるのみとなった。

曲は『平家物語』や『義経記』『曽我物語』『太平記』などに題材をとり、その数も「舞三十六番」として伝えられているが、実数は一〇〇近くあったらしい。文体は散文、声調は仏教の声明（しょうみょう）をもとに、当時流行の平曲・宴曲・曲舞のものをとり入れ、語りがほとんどで、楽器は大小鼓・笛を用い、扇拍子のみのこともあった。舞は三人舞が原則で、大夫が立烏帽子・素袍袴に小刀をさし、左右に折烏帽子のワキ・ツレが従った。その後世芸能に及ぼした影響は大きく、とくに草創期の古浄瑠璃には、ほとんどそのまま借りているものが見られ、元禄以降にも浄瑠璃にその想を流用する風習は絶えなかった。（野口達三）

とある。その現存するものは、福岡県筑後市の大江の幸若舞が唯一のものとなっている事は、すでにご承知の通りである。幸若舞そのものについては、比較的入手し易い著作に、平凡社・東洋文庫・(355)・(417)・(426)『幸若舞』（全三巻）があり(1)「入鹿」「大織冠」「百合若大臣」「信太」「満仲」「築島」。(2)「文覚」「景清」「八島」「高館」。(3)「烏帽子折」「敦盛」「和田酒盛」「夜討曽我」がそれぞれ原文で納められ、註と解題がつけられているので、これらを精読されると私の以下続く所論のご理解が早いと思う。また福岡県社会教育課が発刊した『福岡県郷土芸能』（昭和四十三年）にも、「筑後大江の幸若舞曲」と題して、詳しく解説されており、亦その原本も山口県防府市の毛利博物館に保存（県文化財）されているのでここでは詳しくふれない。ただこれらの諸本から、中、近世の民間芸能におよぼした影響を証拠づける部分を二、三摘記してみよう。

幸若詞章の分類は前記、『福岡県郷土芸能』でなされているが、それによると、

（一）平治物

伊吹。鎌田。夢合。馬揃。浜田。九六貝。

㈡平曲物（平家物語諸本及源平盛衰記）

硫黄ケ島。文覚。木曽願書。敦盛。那須興一。景時。（附築島）

㈢判官物

伏見常盤、常盤問答。笛巻。未来記。鞍馬出。烏帽子折。腰越。堀川夜討。四国落。静。富樫。笈捜。八島。清重。和泉ケ城。高館。含状。

㈣曽我物

切兼曽我。元服曽我。和田酒盛。小袖曽我。剣讃歎。夜討曽我。十番切。

㈤大平記物

新曲

㈥特殊物

入鹿。大職冠。百合若大臣。信田。満仲。日本記。張良。

に分け、それぞれの出典を明らかにしている。また東洋文庫『幸若舞』（Ⅰ）の分類も、新作物として、三木。本能寺。を加えたほか、ほぼ同様の分類となっているが、その完成の時期を一応元和・寛永から寛文ごろとみているようだ。

一方、『謡曲大観・首巻』（佐成謙太郎・明治書院）によれば、『烏帽子折』の出典を『義経記』にあて、さらに幸若舞曲と謡曲との題材を同じくしている曲目、二十九曲の内に、幸若舞『烏帽子折』と、謡曲『烏帽子折』『熊坂』を同一題材の第一にあげ、幸若舞と謡曲を同時代の文芸とみているのである。また佐々木氏は謡曲の浄瑠璃への影響の中で『烏帽子折』から浄瑠璃『源氏烏帽子』をあげているが、大波多海氏は前述の「炭焼小五郎の史実と伝説」の中で、この問題をとりあげ、

幸若舞『烏帽子折』→お伽草子『一二段草子』→古浄瑠璃『花物狂』（一六六二）・『殿上闇打女袖鑑』（一六六四）→浄瑠璃『用明天皇』（一七〇五）→浄瑠璃『用明天皇職人鑑』（近松門左衛門作・一七〇五）へと発展していくことを指摘されている。

さて、室町期の幸若舞が、その後の民間芸能へと大きく影響していく姿は充分ご理解頂けたと思うが、ここで幸若舞『烏帽子折』の分析を試みてみたい。『烏帽子折』の内容については、別表によって示すが、まず東洋文庫『幸若舞』の解題（荒木繁氏）によって、その構成の複雑さをみてみることにする。

『烏帽子折』は前半の牛若丸元服説話と、後半の熊坂退治説話からなっているが、その中間に青墓の君の長の口を通して、山路の草刈館の由来が長々と語られるのが大きな特色となっている。これは全曲の三分の一という分量を占めており、本筋とは関係のない説話が挿入されていることに、多くの人々が疑問を持ってきた。ちなみに『義経記』では盗賊退治が先で、元服が後と順序が全く逆で元服の場所が『幸若舞』は鏡の宿であるのに対し、『義経記』では熱田神宮となっている。しかも話の中心である烏帽子折説話を欠いている。また『幸若舞』では、青墓の宿で熊坂長範を退治するが、『義経記』は鏡の宿で由利太郎・藤沢入道の一味を退治する。

一方、謡曲『烏帽子折』は、元服、盗賊退治の場所、入物共に『幸若舞』と同じであるが、中段の草刈山路説話を欠いた二段構成である。このことについては、柳田国男氏は「絵姿女房説話」で、

「或は既に用いられなくなって居た舞々の古曲の中に以前この一篇が独立してあったこと迄は、想像して見てもよいかも知れぬ。私がそういう想像を抱く理由は、『烏帽子折』曲中の草刈山路は、敍述が精細でやゝ長たらしく、ほぼ語り物の体裁を備へているからである。」

と幸若舞の中段は、独立した一編の詞章の混入説を提唱されている。もともと、この『烏帽子折』は、塩売文太長者の出世物語である『御伽草子』の「文正草子」が祝儀物といわれ、正月の読初めに用いられたのと同様、『烏帽子折』も独特の曲調をもつ祝儀物といわれ、義経の元服、初手柄という芽出たい話の中に、真名野長者の女玉世姫の出世説話を挿入して、より一

層祝儀性を高めたものとみてまず間違いはあるまい。「山路草刈笛説話」の成立については、後に詳しく述べるが、ここではもう一つの論題『真名野長者由来記』に移ることとしたい。

前述の伊東東氏著『内山観音雑考』によれば、真名野長者及び蓮城寺に関する縁起書の存在を調査、整理して、次のように分類しておられる。

(1)蓮城寺蔵『真名野長者由来記』（三冊本）

奥書・大宝元丑年七月二日写。貞和元酉年九月写之。嘉永元申年三月吉日沙門尊法代書写了。

(2)内山・武蔵家蔵（八巻本）

三巻内山記、五巻深田記、深田記末巻予州仙法大山寺故事

奥書・享保第十　仲夏桑島教順六十三歳写焉（後述26頁の般若寺のものと同種か？）

(3)臼杵中学校蔵（七巻二冊）

奥書・文政十三年　仲秋写之小野隆英（花押）井水蓑貞是写。

(4)竹田市宇野氏蔵「蓮城寺由来記」

奥書・文化十一戌年初冬写之。

(5)大分県社寺名勝図録所載「蓮城寺縁起」

奥書・真言宗古義派蓮城寺第十七世小僧都貫巡大和尚。

(6)「内山略縁記」

(7)「万之長者一代記」波多野政男編。

(8)「伝説　炭焼小五郎」内山観音。

となっており、これらの諸史（資）料から蓮城寺の創建を平安末期、由来記の完成を江戸初期と比定されている。

一方、橋本操六氏も前述「炭焼小五郎の史実と伝説」で、引用資料として、

A＝幸若舞「烏帽子折」（室町時代）

B＝有知山縁起（享保一一年・一七二六）

C＝豊鐘善鳴録（延享元年＝一七四二）

D＝豊後国志（享和三年＝一八〇三）

E＝真野長者実記

F＝真野長者由来記（明治二十年訂正）

をあげておられるので、縁起、実記、由来記等の完成、成立は一応江戸時代とみて異論はまずあるまい。

次にこれらの資料をもとにして、『義経記』以来、内山観音発行『伝説炭焼小五郎』までの分析を〝別表〟にして示してみよう。

別表、幸若舞『烏帽子折』に続くものを代表して、宝永二年（一七〇五）、近松文左衛門が竹本座で上演し好評を拍した『用明天皇職人鑑』があるが、その概要を述べる。

敏達天皇の弟花人親王は仏法に帰依し、異母兄山彦皇子は外道を信じる。花人との法力比べに敗れた山彦皇子は配下の道士〝いかるだのますら〟に命じ、花人を討ってその愛人豊後真野長者の娘玉世姫を奪おうとする。花人は佐渡に流浪して五位介諸岩に救われ、さらに、播州高砂浦の鐘供養の場で真野長者に見出され、豊後に下った。山路と名を改め長者の草刈童となった花人は玉世姫と密会を重ねるが、そのうち姫は身ごもった。姫の継母は毒草によって胎児をおろそうとするが、仏法の擁護によって皇子聖徳太子が誕生、山彦一派の外道は滅びる。

この一作は竹田出雲が義太夫に代って竹本座の座本となり、近松と結んだ第一作で、人形や舞台装置に新工夫が加えられ、見世物的要素が大幅に加わった画期的なものという。中でも二段目の松浦庄司館の場面における母の身代りの死は、以後の身

義経記・謡曲鳥帽子折・幸若舞鳥帽子折・真名野長者由来記分析表

段	前
義経記	（鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事） ①盗賊、由利太郎・藤沢入道・近江鏡の宿の長者の家に押入、牛若大奮戦し、五人討取る。 ②美濃青墓宿で兄朝長の菩提を弔う。
謡曲・烏帽子折	（場所）近江国蒲生郡鏡宿 （季節）九月 三條の金売吉次が弟を連れて東へ下ろうとすると牛若が追うて来て同行を求め、伴なはれて近江の鏡の宿まで来た時、追手のかかった事が判ったので、元服して姿を変えるため、烏帽子屋に立寄り、左折の源氏の烏帽子を誂へると、亭主は、左折の烏帽子に就いての嘉例を語り、折終って祝言を述べる。そこで牛若は、金の代りに刀を与えて立去ったが、亭主の妻がその刀を見て、私は鎌田正清の妹で、この刀には見覚えがある。今のは牛若君であろうと言ふので、驚いた亭主は妻と共に牛若の跡を追い刀を返す。 （源氏折の嘉例説明あり）
幸若舞・烏帽子折	(1)近江鏡の宿、菊屋宿泊。 (2)平家牛若捜索の早馬。 (3)急に元服を思い立ち、烏帽子屋にて左折の烏帽子所望。 (4)烏帽子代の代り牛若太刀を与う。 (5)烏帽子屋女房鎌田正清の妹、牛若を見破り、瓶子一具、小結と共に太刀を出世の門出にと贈る。 (6)牛若仮の名を「京藤太」と改める。 （源氏折の嘉例説明なし）
真名野長者由来記	(1)三重玉田の生れ「藤次」七才の時、〝みなしご〟となる。 (2)炭焼又五郎の養子となり、「小五郎」と改名、炭焼を業とする。 (3)久我大臣の娘、玉津姫、顔や身体に痣あり、三輪明神に縁結びの祈願。お告げで豊後三重の里の炭焼小五郎を尋ねる。 (4)小五郎と対面。小五郎は一応断ったが、たっての姫の願いで、食べ物や、世帯道具を買うため、姫から貰った小判を持って山を下る。 (5)鷲鳥に投げつけて小判を失う。 (6)炭焼釜の所にいくらでもあると云う言葉に一諸に行くと一面黄金の山であった。 (7)山王権現の神夢で金亀ケ淵に沐浴すると姫も小五郎も美しく生れ代った。 (8)黄金のおかげで夫婦になって三年目には、三千人の家来と、五十七ケ所に家が建ち並んだ。 (9)支那の船三隻から宝物や、珍らしい品を買い求め大いに富み栄えた。

（挿　入　劇）

(1)美濃国青墓宿長者の館に着く。
(2)京藤太（牛若）草刈笛を吹く。
(3)青墓の長者草刈笛の由来を語る。
(4)用明天皇十六才后を探すため。
(5)扇六十六本に絵女房をかかせ、国々に廻す。
(6)筑紫豊後の内山に長者一人あり。
(7)人々万の長者、略してまの殿という。
(8)内山正観音の申子、姫一人あり。
(9)玉世姫十四才。扇絵とそっくり也。
(10)内裏へ参内、一の后への宜旨。
(11)長者一人娘の理由で固辞。
(12)一日の内、芥子一万石送れとの難題。
(13)女房の力で解決。
(14)蜀江の錦で、両界の曼陀羅。二十尋に七流れ奉れと難題。これも内山の聖観音の力で解決。
(15)天皇、玉世姫恋しさに筑紫に下り、山路と名乗り、長者に奉公。
(16)牛飼となるが、草刈る道が判らぬため、笛を吹くと、他の

(1)長者屋敷造営、新築祝いの日（八月十五日）満月が池に飛び下って、玉津姫の胸中に飛び込む。山王宮のお告げで姫の懐妊を知る。
(2)玉津姫女子安産。口中に三ケ月の黒痣があるので月の精の宿る印として般若姫と名付く。
(3)百済の船頭龍伯、般若姫の守護仏として、一寸八分の黄金の千手観音贈る。長者、龍伯に天台山奉献の三万両を託す。
(4)唐土大王、般若姫の美しさを聞き、画工を送って写し絵を行い、玉絵箱に納める。
(5)都の帝、般若姫の美しさを聞いて、皇子の后として、上京の勅使を使かわせらる。長者辞退。代りに玉絵箱献ず。
(6)白胡麻千石、黒胡麻千石、油千石、献上の難題。直ちに献上する。
(7)虎の皮千枚。猟虎の皮千枚。豹の皮千枚。再び献上の難題。これも即座に献上。
(8)伊利大臣、三百人の兵を引き連れ、白布千反、黒布千反、錦千反、唐綾千反、珊瑚玉五百粒、瑠璃玉五百粒、献上の三度目の難題、これも果したので「豊後の国三江の里、真名野長者」の綸旨を贈る。
(9)豊日の皇子、玉絵箱をみて、愈々般若姫を恋しくなり、三重に下向。長者の館に入り、牛飼いとなる。（名、山路）

段　中

牛飼、山路の笛を楽しんで代りに草を苅る。

(17)「山路の草刈、夜の笛、若布刈るは田子の浦、若草刈るは武蔵野よ。若布、若草、和歌の浦、用明天皇の恋故あそばす笛をこそ、草刈笛と申すなれ。」

(18)天皇を失って都では大さわぎ。

(19)博士の占ひで「八月十五日、宇佐八幡放生会の時、豊後内山の長者に神事をつとめさせると天皇還御ありと言う。

(20)長者に命令あり。流鏑馬を知らぬため困っていたのを山路の助けで見事につとめる。

(21)山路は用明天皇と判明、玉世姫を伴い、都に還御される。

(22)「其後、御子を儲けさせ給ひて、聖徳太子と申し、我が朝に仏法を弘めさせ給うなり。玉世の姫は正観音、用明天皇は阿弥陀如来の化身。聖徳太子救世観音の権現なり。用明天皇恋故遊す笛をこそ、草刈笛と申すなれ。知らぬ事をば、我御前達笑はぬ事であるぞとよ。」

(10)山路、牛に乗って笛を吹く。

(11)般若姫急病。神に伺いを立てると、「三重の松原で笠掛の的を射て、神慮を休めよ」と神託あり。

(12)山路、荒馬、大龍黒に乗る。見事三度の的を射ると姫、病気平癒。これを以って本朝やぶさめの初めという。

(13)山路と般若姫婚姻。橘の豊日の皇子の身分初めて明かす。

(14)都にも豊日の皇子の行方判明。大伴の村主、勅使として迎えに参上する。

(15)豊日の皇子帰落。「以後この地を大内山と名付けよ。」これが三重内山のいわれという。

(16)般若姫、姫君安産。玉絵姫と名付く。

後段			
（遮那王殿元服の事） 尾張・熱田大明神の御前で牛若元服、左馬の九郎義経を名乗る。	（所）美濃国不破郡赤坂宿、牛若一行が美濃国赤坂宿に泊ると、熊坂長範が吉次の財宝を狙って夜襲して来たが、牛若は唯一人秘術を盡して大勢の盜下を斬り、遂に長範をも討取る。	(1)苟野が原の盗人の長、熊坂の長範、手下大将七十余人。小盗人三百人。 (2)熊坂の身上話し。 (3)手下小六。長者館の下見。 (4)義経に気付き、報告。 (5)熊坂一味の討入り。 (6)義経八十三人討取る。 (7)熊坂と一騎打。熊坂斬死。 (8)「それよりも源、奥へ下らせ給ひて、天下を治め給ひけり。」	(1)長者一族、臼杵深田の新御殿に移る。 (2)般若姫、臼杵の浜出立。都に向う。 (3)長者夫妻、紫雲山にて見送る。別名姫見山ともいう。 (4)周防の国、平郡島にて嵐に合う。 (5)姫島まで押し戻され、剛子舞の祝儀を行う。 (6)周防国大畠の鳴戸で再び遭難。 (7)姫の守護神、千手観音を波間に沈め、風浪納まる。 (8)姫、家人の多くを失ったのを哀しみ、海中に投身した。一度は救い上げられたが遂に薨去。年十九才という。 (9)姫の遺言で、姫と水死者四十余人の屍骸を葬り、その地、周防、魚の庄般若寺を姫の菩提寺として建立。 (10)帝は姫に「般若皇太后宮」を贈官。 (11)伊利大臣の三男、金政公。玉絵姫の婿となり「草刈右衛門助橘の氏次」を名乗り、長者の後裔、富み栄えた。 (12)守屋大臣長者を攻める。 (13)長者、般若姫供養のため、予州高浜太山寺、周防般若寺、深田満月寺建立。 (14)これより先、百済の僧、蓮城が、長者の家を修築して建てたのが、内山蓮城寺である。 (15)蓮城寺に長者夫妻墓地、遺品あり。

代り劇の源流となった話題作であった。なお、この近松作の『用明天皇職人鑑』と、幸若舞『烏帽子折』の間に古浄瑠璃『ようめい天おう』があるが、これの原本には私はまだ接していない。恐らく内容はほぼ同様であろう。

一方、『真名野長者由来記』については、山口県熊毛郡平生町の般若寺（後章で詳述）の般若寺縁起（三巻）があるが、後段、般若姫遭難後には『柳井』『姫田川』などの地名の起りをはじめ、「大晦日の真夜中に姫の霊火が海から飛んで来て、観音堂の灯明に点火する」。「嵐で離散した船を集める大鼓（虚空大鼓）が聞える」など更に詳しく記述されているが、全編を通じ、前者とほぼ同様の内容、構成となっている。

別表の分析

さて、謡曲及び幸若舞『烏帽子折』の原本は『義経記』とされるが、『義経記』を原典としてその分析を試みてみよう。

『義経記』は義経の初手柄ともいうべき強盗退治を近江鏡の宿の出来事とし、盗賊は由利太郎、藤沢入道で、義経のため討取られたのは五人である。次いで美濃青墓宿で兄朝長の菩提を弔うのである。舞台は尾張の熱田神宮に移り、神前で以って元服、左馬の九郎義経を名乗るが、「鏡の宿吉次が宿に強盗の入る事」と「遮那王殿元服の事」の二段構成の中に近江・鏡の宿と、美濃、青墓の宿、尾張・熱田大明神の三地区が舞台になっていることに注目したい。

謡曲『烏帽子折』は『義経記』と同様、前段、後段の二段構成で中段を全く欠いている。近江・鏡の宿を前段とし、『義経記』とは逆にここで義経自らが元服するが、烏帽子屋の亭主が源氏の左折の烏帽子についての嘉例を語り、祝言を述べる。鎌田正清の妹も登場、出世の門出として太刀を贈る。後段は美濃・赤坂宿で盗賊熊坂長範の夜襲を退治し、熊坂長範を討取るが全体の構成は、烏帽子折の嘉例と旧臣の妹の祝いが中心で、その後に義経の初手柄と続くのである。

幸若舞『烏帽子折』では、謡曲と同じく近江・鏡の宿で義経の元服、鎌田正清の妹、太刀を出世の門出に贈るまではほぼ同様の構成だが、仮の名を「京藤太」と改める。次いで前二者には見られぬ構成として、美濃国青墓宿で宿の長者が「草刈笛」の由来を長々と語る下りがあり、前章でも述べた通りほぼ全体の三分の一の分量をとっている。これがいわゆる真野長者説話

とも言うべき物語りだが、民俗学的には、「絵姿女房」、「貴人（殿様）の難題」「笛吹童子（牛飼山路）」に分類され、最後は用明天皇と玉世姫の間に聖徳太子誕生。用明天皇は阿弥陀如来。玉世姫は正観音。聖徳太子は救世観音の権現なり。と仏教説話にまで飛躍発展する。

後段は同じく青墓の宿で熊坂長範の夜襲に合い、手下三百余人を相手に奮戦して長範以下八十三人を討取り「それよりも陸奥へ下らせ給ひ、天下を治め給いけり」で終るのである。幸若舞の中にも他に二、三劇中劇の趣向があるが、中でも最も複雑な構成をとっているのである。

次に本題とも言える『真名野長者由来記』の分析を試みたい。まず前段の炭焼長者説話は、『義経記』、『謡曲、幸若舞』にも全くみる事ができぬ初めての登場である。中段の真名野長者説話では、般若姫誕生、絵姿女房、貴人の難題、牛飼山路、玉絵誕生と続く。ここで初めて舞台が三重内山から、臼杵深田へと移って、更に周防大畠の瀬戸における般若姫遭難説話となるのである。さらに後段は深田満月寺と、周防般若寺の創建。草刈家開創が主題となるのである。

以上、『義経記』。謡曲『烏帽子折』。幸若舞『烏帽子折』。と『真名野長者由来記』を比較検討、分析してみると、真名野長者伝説は、明らかに、

(1)炭焼長者説話

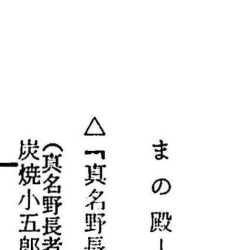
(2)幸若舞『烏帽子折』の中段（挿入説話）の影響を受けた長者、まの殿（主体は用明天皇と玉世姫の恋物語）を改変した真名野長者説話。

(3)満月寺、般若寺創建説話と、草刈家由来説話。

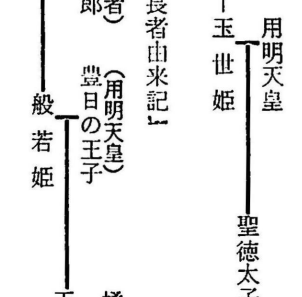
の三つから構成されている事が判明する。この事は、すでに前述したように、柳田国男氏が、炭焼長者の伝説は全国に分布するが、真名野長者は豊後の専売であることを指摘され、また幸若舞の玉世姫が、般若姫に変化していることについて、周防般若寺は寺名が先で、般若姫伝説は寺名に合せて後世創作されたものであろうと問題提起されているのは草見である。

なお、ここで幸若舞『烏帽子折』と、『由来記』から、その人脈を整理すると次の通りである。

△幸若舞『烏帽子折』



△『真名野長者由来記』



四　真名野長者創建寺院踏査記

―蓮城寺・満月寺・般若寺・太山寺―

有智山蓮城寺

―大分県大野郡三重町―

蓮城寺については、手元に蓮城寺発行の内山観音略案内があるのでそれを摘記してみる。

当山は、今を去る一千四百年前、欽明天皇十五年百済より蓮城法師が渡来し、真名野長者（炭焼小五郎）の創建せる寺にして豊後国最古の寺、九州西国十一番の霊場なり。真名野長者は、継体天皇三年、三江郷（三重郷）玉田に生れ、推古天皇十三年九十七才にて死す。長者幼名を藤治と云い、孤児となりて山間に移り住み製炭を業とし、文字を知らず養父の後を継

ぐや人呼んで小五郎と称し一介の樵子に異らざりしが、継体天皇二十四年三月、南都久我大臣の娘玉津姫大和国三輪明神の夢告げによって来り夫婦となる。これより富貴栄えて欽明天皇より「満野長者」の号賜り豊後の国司たるの宜旨を蒙りたり。

長者夫婦の間に一女般若姫生る。姫は妙相優美な稀世の美人として、唐土まで聞ゆ。欽明天皇の第四皇子（後の用明天皇橘豊日皇子微行二ケ年内山に御滞在遊ばされ姫との間に玉絵姫生る。玉絵長じて橘家より金政を迎へ、長者の後を継ぎ今日に至れり。

とあって、また寺宝類もほぼ真名野長者由来記に準じ次のように説明している。

△秘仏千手観音（当山本尊）＝西天笠昆首羯摩天作千手観音菩薩にして欽明帝十五年支那天台山恵恩大師の高弟蓮城法師渡来の節持来り茲に有智山蓮城寺を建立し仏法を宣布す（当山開創）。当山には開帳秘仏として大悲閣奥殿に安置す。現像仏千手観音は藤原定朝作として脇仏不動、昆沙門の二仏と共に伝えられる。

△秘仏一寸八分観音＝欽明天皇四年、百済の船夫竜伯という者般若姫御守仏として閻浮陀金一寸八分観音菩薩を持ち来る。これ実に今を去る一四二〇年前にして、仏法東漸の濫觴たる感あり。当山奥の院（長者堂）の秘仏本尊なり。

△薬師堂＝本尊薬師如来、脇仏日光・月光二尊並びに一千八体の何れも木像仏を安置し、敏達帝十三年神人の妙手になると云う。我国には京都三十三間堂観音と共に千体仏として希世の霊仏なり。（三重町重要文化財）

△大師堂＝弘法大師を安置す。当山創建当時華厳宗なりしが現今は真言宗なり。

△六角堂＝聖徳太子を安置し八万四千の一切経を蔵む。（三重町重要文化財）

△山王宮＝当山鎮守にして真名野長者以前より安置し「不聞不見不言」（三重町文化財）の三猿を祭る。

△長者夫婦の墓＝文部省指定重要美術品で薬師堂北側にあり約九百年前建造の石塔である。

△永正供養塔＝薬師堂の前にあり、四百七十年前の塔。

△五重の塔＝大悲閣（本堂）南横にあり七百年前建立せしものと学者の説あり。

△文仲供養塔＝文部省指定重要美術品。大悲閣前にあり六百年前の塔なり。
△文保供養塔＝大悲閣南横にあり七百年前の塔なり。その他四百年前の石塔は数多し。

とあり、以上の外に寺の門前には、金亀ケ淵の伝説地がある。

なお、これらの建築物と金石文についてはすでに前述のごとく、伊東東氏と橋本操六氏があらゆる面から解明され、一応創建時期は平安末期以前、また鎌倉期に日羅創建から、蓮城創建説に変ったとあり、これはほぼ妥当の説とみて差支えはあるまい。なお天明六年正月二十七日夜、護摩堂から火を発し、本堂、輪蔵、鐘楼門、僧院を焼失、弘化五年三月、本門、石壇、石垣、石塀、通夜堂、経蔵等再建したが、さらに文久二年本堂及び庫裏を焼失。大正十五年春秘仏殿の新築が成り、大正十二年の公園開設と併せてほぼ現在の寺域が完成している。

紫雲山満月寺

―大分県臼杵市深田―

『大分県地方史』（一一七号）に、菊田徹氏が「遺跡としての臼杵石仏―石仏周辺の発掘調査の成果」と題し、考古学的にみた臼杵石仏の造顕や、満月寺の存在について報告されている。その中で、

「この遺跡、特に磨崖仏の造顕に関しての記録は今のところ皆無である。寺院（満月寺）に関しては、中世末、近世の二、三の資料の中にわずかではあるが、記録を見い出すことができる。しかし、これらの記録の中からは、寺の創草や廃絶の時期、またその伽藍配置や規模、石仏と建物の関係については知ることはできない。」

といわれている。ただ史料的には近世のものは別として『大分県史料』第二十五巻「清原宜雄所蔵文書」の天正十五年（一五八七）の条に「満月寺増舜書状」などを参考史料とし、さらに菊田氏が参加された臼杵石仏地域の発掘調査を検討された結果、

「平安後期（十二世紀後半）の遺物も多少含まれるが、鎌倉期（十三世紀～十四世紀初頭）に属する遺物（中国製陶磁器、

土師質土器、中世陶器、瓦等）の出土量が多く、室町期になると遺物の量は減少し、中でも十六世紀時代になると激減する現象が認められる。」

と述べ、さらに、

「出土遺物等から磨崖仏に関係する寺院としての満月寺の建物が十二世紀後半頃から建てられはじめ、十三世紀初頭の瓦葺建物によって一応伽藍の体裁が整えられ、徐々に建物の変遷をたどり、かつ伽藍規模の縮少をみながら十七世紀前半頃まで存続したと考えることはできよう。」

と結論づけている。つまり鎌倉期が最盛期で、室町期にはすでに衰退期にはいっていたとみてよいであろうが、これらはすべて今後の考古学的研究の成果を待つより外なく、私共が云々するには問題が大き過ぎる。ただ言える事は、臼杵石仏と、真名野長者伝説とのかかわり合いはすべて近世、つまり江戸期に入ってから、石仏造顕にからめて付会され創作されたものではなかろうか、という事である。というのは深田地区の狭少な地域に比較して、伝説そのものは大和の飛鳥寺院や、難波の四天王寺を連想させるようなスケールが壮大で、しかも地域の中には、炭焼小五郎から真名野長者まで、つまり、発祥から終焉までの遺構、伝承地が整い過ぎているのは余りにも不自然であろう。

次に世に言う「花炭」にふれてみたい。『内山観音雑考』によれば、伊東氏は臼杵市・市浜木津氏所蔵の文書から、

一元禄七戊正月廿一日深田炭焼小屋修覆の事。

一文久元丙四月十八日深田村（臼杵在）炭焼太右衛門病身職分難相勤に付御目見地方五石高共世悴卯三郎へ被仰候野村大庄屋願書差出候付願ひ之通被仰度旨存寄書付相添差上る六月十三日願之通入替り被付候事、右に付花炭焼立差上度且来春内山観音開帳之節、宝物に出度願被仰付炭焼用之諸品相願仰付候

一文久元丙四月十八日深田炭焼太右衛門父子入替り願被仰候に付花炭焼立云云

一文久元年十一月八日深田村炭焼卯三郎事花炭焼用竹木等願出御渡相成度候事

一文久元年丙十一月八日深田村炭焼卯三郎、花炭焼立用柄竹三束松十本（三尺回リ）カヤ三十束、縄十番、簾十束、クヌギ三百五十貫目相願ひ何も相渡候様被仰付

一同十二月二十六日深田村炭焼卯三郎花炭焼立に付小屋掛用カヤ簾縄代九十六匁御下被相成候事

を摘記されている。花炭は現在満月寺、内山蓮城寺、臼杵市立図書館郷土資料室に保存されているが、その原料はススキの穂などで実用的価値はないものである。また「花炭の由来」という花炭の宣伝用木版刷が愛媛県立松山図書館及び後述の山口県柳井市の『湘江庵由来記』にあるが、湘江庵のものは、

抑々花炭の由来は人王二十七代継体天皇御代に豊後国海郡部深田里炭焼又五郎と申者有に一子無して同国大野郡玉田より藤次と申者を養子にして又五郎八十一才にて死す其時藤次名を炭やき小五郎と改、其頃都に玉津姫三輪大明神のつげにより姫都御忍只一人御下向有て小五郎と夫婦のかたらいをなし給ふ夫より小五郎のすみかま□と成折柄姫一人誕生し給ふ般若姫と号、其姿艶さ世にたぐいなき事都に聞へ欽明天王橘豊日皇子度々望せ給ふに一人の姫仰上ざる故三度のなんだいを蒙、初メに□□俵千俵焼□□□是を都へ捧、其後度々なんだいを蒙処なわ千束とまんたら□花炭をやき都へ奉捧故其後万の長者とめいせられ皇子都御忍御下向御座渡せ給ふ所は海部郡□生庄□夫より其所を王出号則長者の宅へ御来有て御□を□其後姫を□し給いて御上京あらせ給ふ用明天皇是也重ねて御上洛の時姫懐入故のこされ給ふ皇女誕生仕給ふて御名は王代姫と号奉る。般若姫上洛時周防国大畠小田浦にて入水ス十九才にしてむなしく成給ふ其後玉代姫に都より草刈左ェ門橘氏次へ五万八千石を添被下之武家へそなえらる也　右炭焼長者の由来を爰に略ス

天正三年甲子年正月吉日

豊州臼杵庄深田住

草刈太郎衛門吉次

とある。以上一連の記録を検討するとき、まず意外に思うことは、花炭の焼立に藩が相当の援助をしている事である。次に

花炭の由来が四国の松山と、中国の柳井に存在することも意外の一つである。勿論、松山には長者ゆかりの太山寺があり、柳井もその地名の起りが般若姫ゆかりの柳の井であるが、松山の三津、高浜、堀江の三港は四国と九州、畿内を結ぶ古代からの瀬戸内きっての要津であり、一方、柳井津も江戸時代には後述のように上の関と共に、瀬戸内の内回りコースの要津であると共に、豊後国東津、坂門津航路の潮待ち、風待ち港でもあった。勿論、西日本の重要な貿易港であり、商圏は瀬戸内だけでなく、遠く日本海方面や、壱岐、対島、五島にも及んでいる。こうした事情から考察するとき、九州の木炭生産地の本拠地の名声を拍すため臼杵藩が真名野長者伝説を、「花炭」と「花炭の由来」を通じて大いに宣伝したのではなかろうかと思うのである。

柳田国男氏説の、木炭生産技術者の各地に進出のお墨付きの一つとなったかも知れぬ。花炭焼きの炭焼太右衛門と、草刈太郎衛門も余りにも似ているし、深田地区における臼杵石仏群の存在もまた真名野長者伝説の箔付けとしては絶好の材料でもあろう。

神峰山用明院般若寺

―山口県熊毛郡平生町―

般若寺については、享保年中の焼失という大火のため古記録を殆んど失っており、解明しがたい点が多いが、ここでは県立山口図書館所蔵の記録を中心に整理してみたい。その大要を示したものに

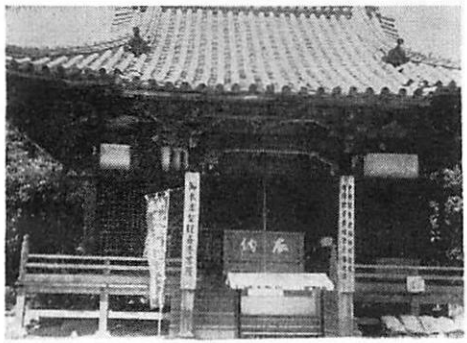
般若寺

柳井町の西南方に当り、樹林鬱茂として蜒たる背巒畳重するものあり、此中の一峰を盤若寺山となす。羊腸たる小徑を辿り迷いては辿りつ、崎嶇たる山道を行いて山巓に臻れば、松杉蓊鬱として四邊幽邃、盡猶暗うして青苔蒸せる石段に続いては其處に神さびし石の華表あるを見る、此傳説盤若姫が永く眠れる墳墓の一の華表なり。石段を下れば其処に姫の墳墓あり、畏くも人皇卅一代用明天皇の御陵も此処に移し共に祀れりと称す。其処に少なる池あり、昔聖徳太子登山の砌、水を求め玉はむとし鞭を以て地に捜し立てしに、清水忽ち湧出し此池を為したるもの、潮の干満によっては水嵩の増減ありと伝ふ、蔓草

蔽ひ繁れる処名も無き草花交でて咲き、水蘇浮ぶ処赤腹見せつ、井守の閑たり悠として水に棲む態、凄愴の気分身に迫るを覚ゆるものあり。

抑も盤若寺は人皇卅一代用明天皇の勅願にして真言宗御室派なり、開基は高麗国慧慈和尚にして観音堂は百濟国聖明王の持仏なりし黄金三寸の観音を斎れるもの、大内家九代の主顕寿院尊信公により、周防卅三ケ所の霊場六番の札所と定められたり、開山より今に至るまで千三百有余年、代を重ぬる事八十六世、古書宝物等多かりしも、享保四年二月火を失し、竜灯の伝説にて有名なりし観音堂傍なる竜灯の松も類焼したり、今の竜灯の松は四代目なり、竜灯は毎年陰暦十二月大晦日の夜大畠海中より舞揚リ、海を亘りて右の松に下る、之を盤若姫の霊なりと称し、遠近より此の奇瑞を見んとて、来り登山する者多しと云ふ。

般若寺境内図山口県平生町


般若寺観音堂　山口県平生町

宝物として猶存せるものは、用明天皇勅額（欽明帝とも云ふ千年以前のものなりと称す）、用明天皇の山路と變名して牛飼に變装せられ牛に座し玉へる鋳像、用明帝御養育の姥立像、三光石（日月星の顕れたる石）外に梵鐘（建長七年鋳）等なり」とあるが、現在道路が乗用車が通行できる幅に拡幅され、駐車場が設けられている程度で、あとはほぼその寺域、景観が維持されている。

また、県立山口図書館蔵『熊毛郡伊保庄・般若寺由来記』によれば、

一当山本尊は聖観世音菩薩

但、唐作と申伝ニて、弐拾ケ年目ニ開帳御免被仰付来ニ御座候

一脇立四天王　唐作と申伝へニて御座候事尤御預ケ仏無御座候事

一十王　拾体御座候事

但　十王堂ニ御座候処、近年破損の事

とあるが、文化四年（一八〇七）には、

一本寺の儀ハ萩表満願寺

一末寺の儀は大野村松蓮寺、宇佐木村谷之坊両寺御座候事

一寺内持仏堂諸仏、左の通ニ御座候事

但、本尊ハ地蔵菩薩、尤行基菩薩の作と申伝ニ御座候。其外千手菩薩・虚空蔵菩薩、毘沙門天王・聖天・弘法大師等也、其内毘沙門天皇は聖徳太子の守本尊、依之弐拾ケ年ニ開帳の御免被仰付来候事

さらに、これが弘化二年（一八四五）の書出帳になると

般若寺

一勅額　壱面

但、般若寺と申寺号の書付御座候事

一三光石

但、石の両面に日月星御座候故、合して三光石と申　尤づし入ニ御座候事

一当山縁記の儀ハ享保年中出火の節に焼失仕候由、無御座候事

一観音堂　一宇　六間四方

一十王堂　一宇　弐間ニ九尺

一鐘楼堂　一宇　九尺四方
一仁王門　一宇　弐間ニ三面
以上四処御悩所ニて御座候事
一持仏堂　一宇　四間四方
但、寺内ニ御座候本堂ニて自作事仕候事
一住　坊　梁行六間、桁行十間
一洪　鐘　差渡壱尺九寸、高サ弐尺六寸
銘文　略
建長七年　十一月十八日造鋳之
諸檀施主敬白
大工　舟治助利
一用明天皇・般若姫の陵、石の玉垣にして御座候事
一豊後国満能長者夫婦の墓、石の玉垣にして御座候事
其外山内所々ニ古墓御座候得共、不分明ニて書出不仕候事
右当寺由来前書の通御座候　以上
弘化弐己ノ七月　神峰山
般若寺（印）
平田弥次兵衛殿

以上の古記録を検討すると、聖徳太子から、漸次用明天皇、真名野長者へと寺伝の変化がみられる事が判明する。

柳井市湘江庵は、柳井の地名の起りと言われる般若姫伝説の柳の井ある寺にある。最も古名楊井が柳井と変ったのは、寛永二年（一六二九）というから種々の疑問を挾む人もあるが、この柳の井の存在は元禄二年（一六八九）の井原西鶴の「一目玉鉾」以来有名となった。この『湘江庵由来記』（県立山口図書館蔵）の中には実に貴重な事実が記録されている。この中から二、三重要なものを摘記してみよう。

一『日本総国風土記周防国』に「橘豊日尊奉服之令汲泉水即ち楊井」とある。

一湘江庵の三代住職月光和尚が、麻生弥三郎を宝暦九年（一七五九）十月に三重蓮城寺に赴かせて『真名野長者旧記』を写し、これを要約して、柳の井戸と合せて十二月に『湘江庵縁起』一巻をまとめたという。これは柳井市立図書館に保存されている。

一般若寺寺宝の『満野長者旧記』（三巻）は、都濃郡切山の山伏医桑原教順が豊後に渡って享保十年（一七二五）夏写とってかえり般若寺に納めた。

用明天皇　般若姫陵　山口県平生町

一周防大島大多満根神社境内の南北朝時代の五重塔は般若姫の供養塔である。

一山口県下の長者の子孫として、「柳井市余田明顕寺、有知山家」。萩市玉江、玉江観音堂、草刈家」。の二家がある。

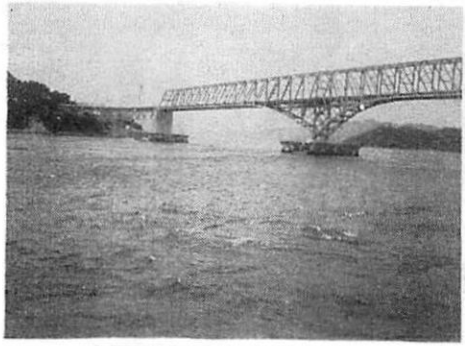
など興味深い記述を散見する。

さて、ここで今一つ般若姫説話に関して最も大事な記事を発見した。それは『陰徳大平記』の中「小早川隆景の般若寺参詣のこと」という一章である。

「隆景は由宇より上の関迄舟遣回し、近郷の一揆並に大島の桑原等が人質取り堅め、既に帰らんとし給ふ所に、折節北風頻りに吹きければ、伊保の庄と云ふ所に少時舟を駐められる、其わたり、西北の間に当って白雲かかり、青松茂して高く天に倚れる峰有って、木間より甍の見えければ、いかなる所にやと問はせ給ひけるに、あれは般若寺と申す寺にて候、昔用明天皇

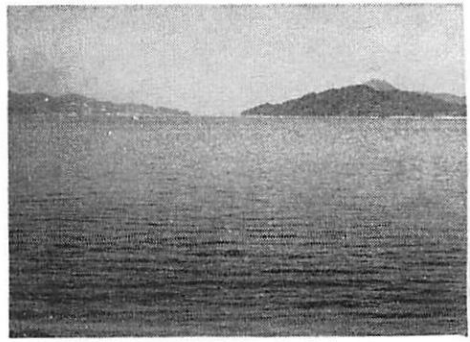
筑紫の摩野の長者が娘と契をこめさせ給ひ、皇女一人儲け給ひしが、天皇は帝都へ帰らせ給ひて後、長者の娘並に三歳に成らせ給ふ皇女を都へ迎へさせ給ひけるに、あれなる鳴門の海門にて御船覆り、皇女浪に溺れて亡せ給ひ候。御門深く嘆かせ給ひて、山作りに課せて、あの峰に御陵を築かせ給ひ、観世音を本尊として一宇の伽藍を建立して、般若寺と云ふ額を親ら宸翰を染められ候、所こそ多きに、彼の山上に建立遊ばされ候ひつる事は、永世鳴門の迫門を越えん舟の、乗るべき塩路を知らしめんために、あの峰に寺を立てられ、彼の寺に舳先を向け、右楫左楫少しも偏らずして乗り候へば、海中に在る所の大鼓岩、没体などいへる巌に舟の砕かるる事もなく、盤渦逆浪にも覆らずして安穏に通る事にて候、あの寺即ち鳴門を越えん舟の水標となして、末世の人を助け給はんとの御恵、何ぼう有難き御事に候、門前なる仁王殊に勝れて利生深しとて、衆生の渇仰他に異に候、かの翁に物賜い、海っ物など召されけるが、やがて自ら般若寺へ参詣し給ひけり。（、、、は筆者註）

聖徳太子鞭の池　山口県平生町

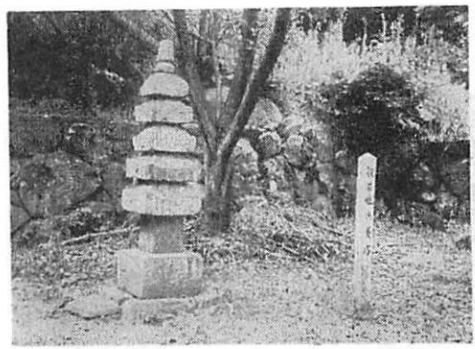


大畠の瀬戸　山口県熊比郡大畠町

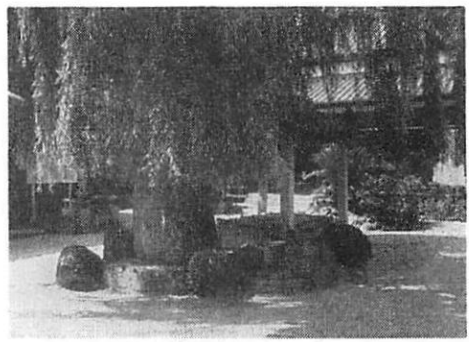
大畠の瀬戸は、柳井市の隣町大畠町と周防大島（屋代島）の間、幅七〇〇㍍、水深二〇㍍の瀬戸で、一日四回潮の流れが変るといわれ、流れの早さは最高七㌔という日本三大潮流の一つである。ゴウゴウという音を立てて流れ下るすざましさは実際に見た人でないとその実感は沸かない。前文（、、、）のところで明らかである通り、般若寺はこの難所を通過する船舶（現在でも一日一〇〇〇隻以上が通過するという）の目標点であり、一方では海難者の供養の寺であろう。山中に数多くある古い墓群は海難者の供養墓であり、瀬戸の最



大畠の瀬戸遠望　柳井市より



般若姫供養塔　山口県大島町　（鎌倉時代）



柳の井　柳井市湘江庵

挾部に立つ大多満根神社五輪塔（鎌倉時代）も遭難者の供養塔と思われる。私も般若寺境内をつぶさに調査したが、用明天皇、般若姫、真名野長者夫妻と称する小墓碑に比較して、周囲をかこむ玉垣が意外と新しく堂々としていて不自然に感じたが、これはおそらく江戸後期のものと感じた。

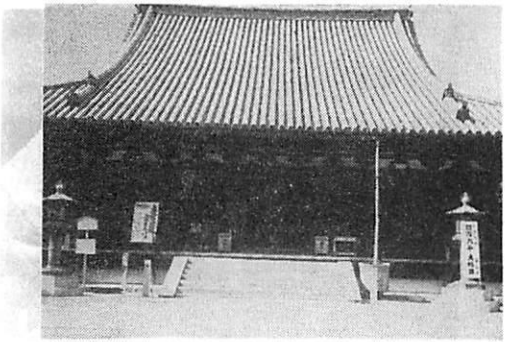
なお、用明天皇や聖徳太子・恵慈等の登場については、坂本太郎氏の名著『聖徳太子』（吉川弘文館）の「道後温湯への旅」によると、推古天皇四年（五九六）の高麗の慧慈、葛城臣を伴った伊予道後温泉の旅は、瀬戸内海沿岸をはじめ、伊予国にあった太子の領地（伊予だけて十四処という）を巡行し、難波から瀬戸内海を通じて、海外に出る制海権を掌握する意味をもつこと。あるいは海岸の船着きに設けられた家屋・倉庫など内海航行の便のための視察、整備を示唆されている。もしこれが事実だとすれば、般若寺の創建の淵源は遠く古代にまで遡るであろう。これは次に述べる太山寺にも通じることである。

瀧雲山太山寺

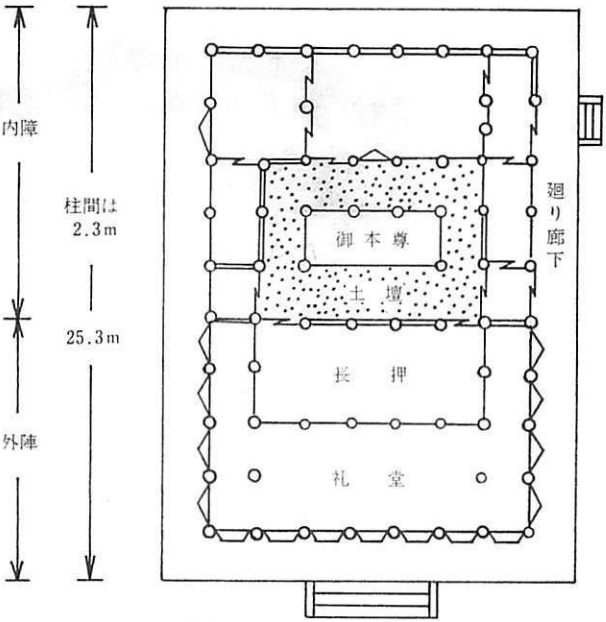
―松山市大山寺町一七三〇―

太山寺発行の略縁起によれば、「天平一一年（七三九）聖武天皇の勅願により行基菩薩開基」といわれ、帝自ら金光明最勝経の写経を山の頂に埋められたという伝えがあり経ケ森とよばれている。

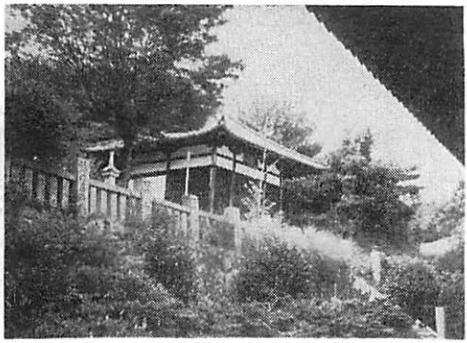
寺伝には「豊後の真野長者が海難にあい、山頂の光を見てその難をのがれた



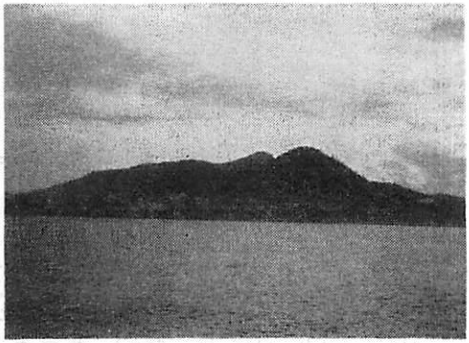
太山寺本堂　愛媛県松山寺太山寺町



太山寺本堂　愛媛県松山太山寺町



太山寺長者堂　愛媛県松山市太山寺町



海からみた太山寺山　愛媛県松山市太山寺町

ので本堂を再建した。」

とある。創建以来二度ほど災害をうけた事が確認されているが、現在の本堂は嘉元三年（一三〇五）の再建で、桁行七間、染間九間、一重の入母屋造り本瓦葺の愛媛県下最大の豪壮な建造物である。柱は和様の円柱、虹梁は太くふくらみを持ち、持送り肘木が挿肘木となっている点は大仏様、斗栱の一部は禅宗様と三様式が融和した鎌倉期の傑作で、特に蟇股の工作がすぐれているといわれている。厨子のある内陣が土壇にあるのは日本ではここだけである。昭和二七年より三年間にわたって解体修理を施した後、国宝に指定された。なお本尊は、聖武天皇が行基菩薩に彫刻させ当寺に納められた木造十一面観音、その後孝謙天皇（七四九）、御冷泉天皇（寛徳二年・一〇四五）、御三条天皇（治歴四年・一〇六八）・堀川天皇（応徳三年・一〇八六）、鳥羽天皇（嘉承二年・一一〇七）、崇徳天皇（天治元年・一一二四）、近衛天皇（永治元年・一一四二）が何れも十二月十八日に十一面観音を御勅納になり、本堂須弥壇に安置されているが、何れも国の重要文化財に指定されている。そのほか本堂には、聖徳太子像ほか八体がおまつりされている。

なお、道後温泉に近い名刹石手寺も聖武天皇の勅命により、神亀五年（七二八）、伊予の大守越智玉純が造立、行基菩薩の開眼という薬師如来を祀ったといわれ、創草の時期もほぼ同様であるのは興味深い。

ただ、太山寺の場合、行基開基説のほか、寺伝によればと前書きし、「太山寺縁起」の中で、

今からおよそ一四〇〇年程むかし、用明天皇二年（五八六）豊後の国の真野長者という方が、津の国の難波に向って渡航中伊予松山の高浜の沖で大嵐に出合い、逆まく波に船は今にも呑まれんばかり、この時真野長者は、日頃より熱心に信仰をしていた観音さまに一心にお祈りをした。すると不思議なことに、山の上より一すじの光明が輝き、闇夜の海を照らし、無事危難をのがれて船を岸に寄せる事ができた。岸に止った一同は、今光り輝いた山の頂きに登ってみると、小さな草堂の中に観音さまがお祀りされていた（現在の奥の院）。長者は大いに驚き、まさしく我々の危難を救われたのは、この観音さまに違いないと報恩感謝のため一宇建立の大願を起こし、早速本国に引き返し、工匠を集め、間口六十六尺、奥行八十一尺の本堂の切り組みを総て終えてから船積み、順風を受け、一日で高浜の岸に着く事ができた。そして夜を徹して組み上げ、東の空の白む頃、一大御堂は朝日を受け、嵺然と輝いて建ち上った。世に「一夜建立の御堂」と称され、貫（ぬき）と楔（くさび）がないのが不思議とされた。

とある。現在の寺域は、太山寺山の東側中腹一帯に広がっているが、この真野長者建立の一夜御堂は明らかに山頂経ケ森奥の院の物語りである。ここは高浜港を眼下に見下し、左下には三津港、右下には堀江港を見下すと共に伊予灘は勿論、九州、中国まで一望という航行上の目標点である。しかも対岸間近かにせまる興居島（こごしま）の小富士、高戸山、犬吠山などが伊予灘特有の冬のアナジ（北西風）、早春のコチ（東北風）の防風壁となって絶好の避難港となっている。ただ潮流の早いのが難であるが、豊後坂門津と難波を結ぶ航路上では、四国寄りの伊予灘ルートをとった場合、三崎半島から三津港までは山が海岸までせまっており、見るべき寄港地がなく、したがって太山寺山麓の三津・高浜・堀江の三港を第一の寄港地とする以外にはない。私が前・前稿で述べた太山寺古代灯台説（観音堂の灯）は、古代から中世、近世までを通じた海運業者の救いの火であったろう。それを代表するのが、真名野長者説話であろう。また、伊予道後温泉に、大国主命・少彦名命の神話をはじめ景行天皇、仲哀天皇、聖徳太子、舒明天皇、斉明天皇、天智天皇、天武天皇などの来浴が記録されているが、これはその目的が単に保養だけでなく、朝鮮や九州平定の策定の場として選ばれたという説がある。したがって天智天皇のとき（六六三）朝

鮮白村江の戦で大敗して以来、天皇の道後来湯が絶えたという。

太山寺の寺域は広く、建造物も豪壮で整然として素晴しい。これだけのものを維持し、守り続けることは古代以来の海運関係者の巨大資本のたえまない信仰と援助がなくては到底不可能であろう。これは、般若寺と共に、数度訪ずれた私の実感である。柳井と言えば般若寺山、松山と言えば太山寺山、海を通してみた二霊山の姿は今でも私の脳裏からはなれることはない。

五　もう一人の炭焼小五郎

―熊本県玉名市・疋野長者―

熊本県玉名市には、より実像に近い〝顔〟をもった炭焼小五郎がいる。これが今から述べる疋野長者である。玉名市に伝る伝説によれば、

「むかし、京の都に熱心な観音信者の美しい姫がいた。ある夜夢枕にたった観音様の〝肥後の小岱山の麓に住む、炭焼きの若者と夫婦になるとよい」とのお告げにより、はるばる小岱山（しょうたいさん）のふもとまでやってきた。姫に一夜の宿を求められた炭焼き小五郎は、貧しい暮しのゆえに米もないと断ったが、姫は小五郎に金を与え、米を求めてくるよう頼んだ。

小五郎は、言われた通りその金を持って家を出たが、「こんなものはどこにでもある。これで米が買える筈がない」と、金を沼のほとりに群がる白鷺の方へ投げ捨てた。驚いて飛びたった白鷺のあとに、湯が湧いているのが見つかった。これが玉名温泉のはじまりで、今から千数百年前の事という。（姫の名を玉名姫という）

一方、姫は小五郎の家のまわりにある石が、すべて金の鉱石である事に気付き、びっくりして小五郎に尋ねると、そんな石ならこの山中にいくらでもあるとの返事、姫は観音様に感謝して小五郎と夫婦になった。その後二人は、その鉱石からとれる金を都に送って金持になり、疋野長者と呼ばれるようになった。長者は後でねたまれて滅んだが、その莫大な財宝をある場所に隠し、「朝日さす夕日輝く木の下に、油千石・米千石・金無畳」という謎めいた言葉を残したといわれる。

とある。この伝説には豊後三重内山の炭焼小五郎とは異り、それを裏付ける確実な遺跡を備えていることにまず注目したい。

玉名郡司が目置氏（ヘギ、ヒキ、ヒオキ）であった事は、菊水町の鶯原発見の銅版墓誌で確実とされる。日置氏は古代から火を司どる氏族といわれ、最近の発掘調査で玉名市立願寺に玉名郡家、郡倉、郡寺、郡氏神（延喜式内社・疋野神社）の存在が確認され、このような世襲郡司を中心とする郡家遺跡は全国でも稀有のことと言われている。また、発掘調査の結果は、玉名市立図書館の資料によれば、

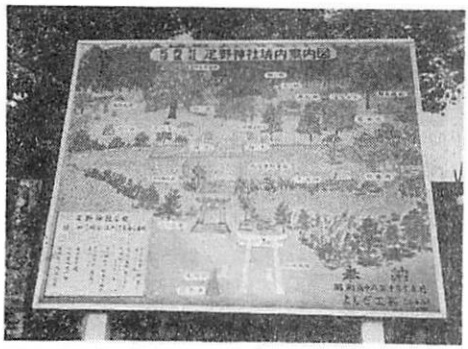
「郡家は予想を裏切って瓦葺で、三代実録貞観十七年条に見える玉名郡倉と比定される遺構は、礎石はあるが瓦葺ではなく二群に分れて約四〇棟が立並んだと考えられ、寺は法起寺式の配置をとり、その瓦は優秀で力強い意匠を示し、新羅系瓦の影響を受けながら、立願寺タイプとも称すべき強い個性を永く持ち続けており、特に珍らしい鬼面瓦すら持っているという田舎では卓越する寺院であった。」

とし、一方、疋野神社については、

「続日本後期承和七年条に官社に預ると見え、延喜式内神名帳に肥後四座（内三座は阿蘇）の一として見える有力な神社であったことが察せられ、祭神波比岐神は他に例のない国神であり、郡司の氏神と考えられるのであって、寺の優秀さと相まって他郡に比し、相当まさった政治力を持った郡司であった。」

と言っている。炭焼小五郎が、疋野長者となって以来の長者屋敷跡伝承地は、疋野神社北側の二

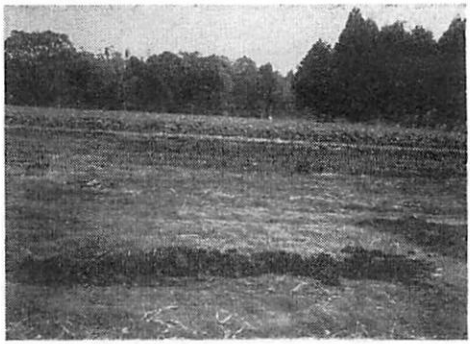
疋野神社　熊本県玉名市立願寺



疋野神社境内図　熊本県玉名市立願寺

○○㍍四方の平坦台地で、実は玉名郡倉跡なのである。疋野長者は郡司「日置の長者」だったのである。さらにその北方一帯は旧玉名郡内最大の条里遺構が確認され、真に長者と呼ぶにふさわしい勢力を保っていた。

小五郎伝説の里、小岱山は海抜五〇一㍍の主峰筒が岳を中心とし、観音岳（四七二㍍）などが連なる花崗岩質の山塊で、むかしは小岱松が群生していたというが、今では全山広葉樹の樹海で覆われている。その山中、山麓一帯は古代、中世の小岱山製鉄跡群や、六反製鉄跡（共に県指定）など、多くの製鉄遺跡や、古墳群が密集していて、鉱産資源で富を得た古代日置氏繁栄の跡がしのばれる。また小岱山周辺の砂鉄は近世まで産出が続き、胴田貫の名刀などその名が残っている。



玉名郡倉跡（通称長者屋敷跡）
熊本県玉名市立願寺

願行寺　熊本県玉名市高瀬

玉名市高瀬津は古代、中世を通じての対外貿易の拠点で、一説では、天正四年（一五七六）に南蛮大砲が高瀬津を経由して豊後に送られたといわれている。近世になると、熊本藩の大阪方面への積出港として栄え、ここから送出される肥後米は毎年二五万俵にも及んだという。古代郡司日置氏の勢力は、一一世紀末頃からの菊地氏の進出で衰えたといわれるが、玉名郡司日置氏の興亡は歴史的根拠があるだけに、豊後の炭焼小五郎・真名野長者の興亡の原型を見るようで興味深い。

（註）(1)　『新撰姓氏録』記載の日置氏関係氏姓
　　○日置朝臣

應神天皇皇子大山守王之後也。續日本記合。

○日置造

出レ自高麗國人伊利須意彌一也。

○日置造

出レ自二高麗國人伊利須使主一也。一名伊和須。

○日置部

天櫛玉命男天櫛耳命之後也。

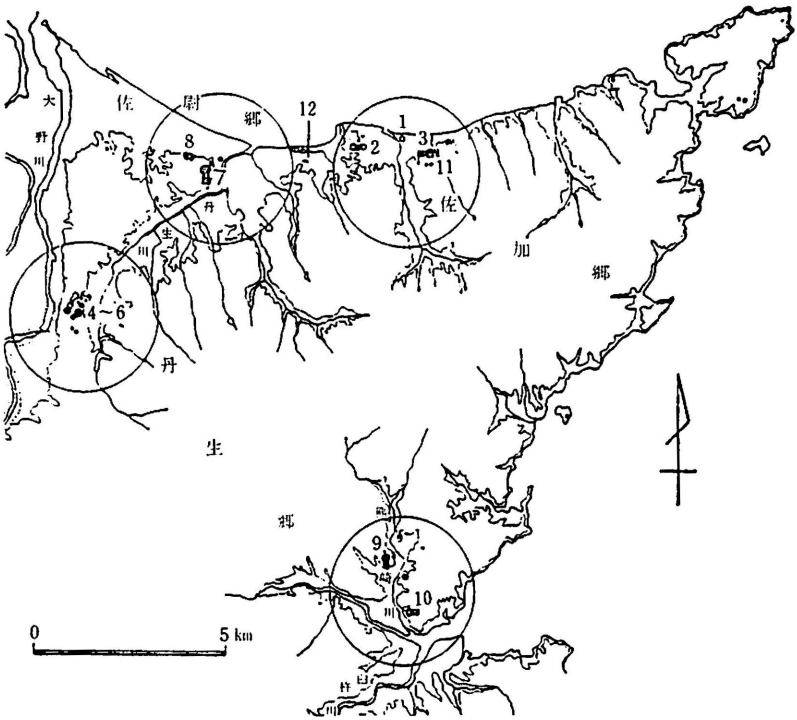
（註）(2)

「匹野神社」は六世紀ごろ、朝廷の日祀―日神信仰―にともなって諸国におかれた日置部（ヘキベ・ヒキベ）の奉仕する神社で、承和七年（八四〇）に官社になった。

六　坂門津と三重・丹生駅

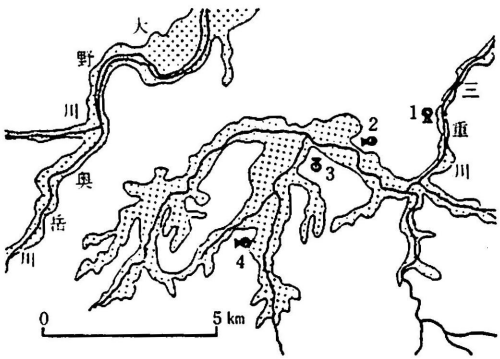
――大野川国衙領ルート――

さいきん、大分県の手で『大分県史』が続々刊行されている。その古代篇、中世篇を通読するうち、私は自分自身の中に、大分県の歴史観を見直ししている事に気付いた、それは渡辺澄夫氏が提唱される荘園公領制の解明が急速に進展して、その内容が除々に明らかになり、例えば大野川流域にしても、私が従来から強調してきた中央と、大野川流域の政治、経済、宗教、文化の直結論の成立が期待できそうな気配を感じたのである。歴史学には門外漢の私にとって「相当おそい時期まで荘園と国衙領が両立して機能を果していた。」事実は全く意外であった。従来は大野郡と言えば「緒方荘の宇佐神宮根本の御神領」という事のみが強調されて、大野郡全体が宇佐神宮領のような錯覚さえ持っていたのが、今では完全に一掃されてしまったので



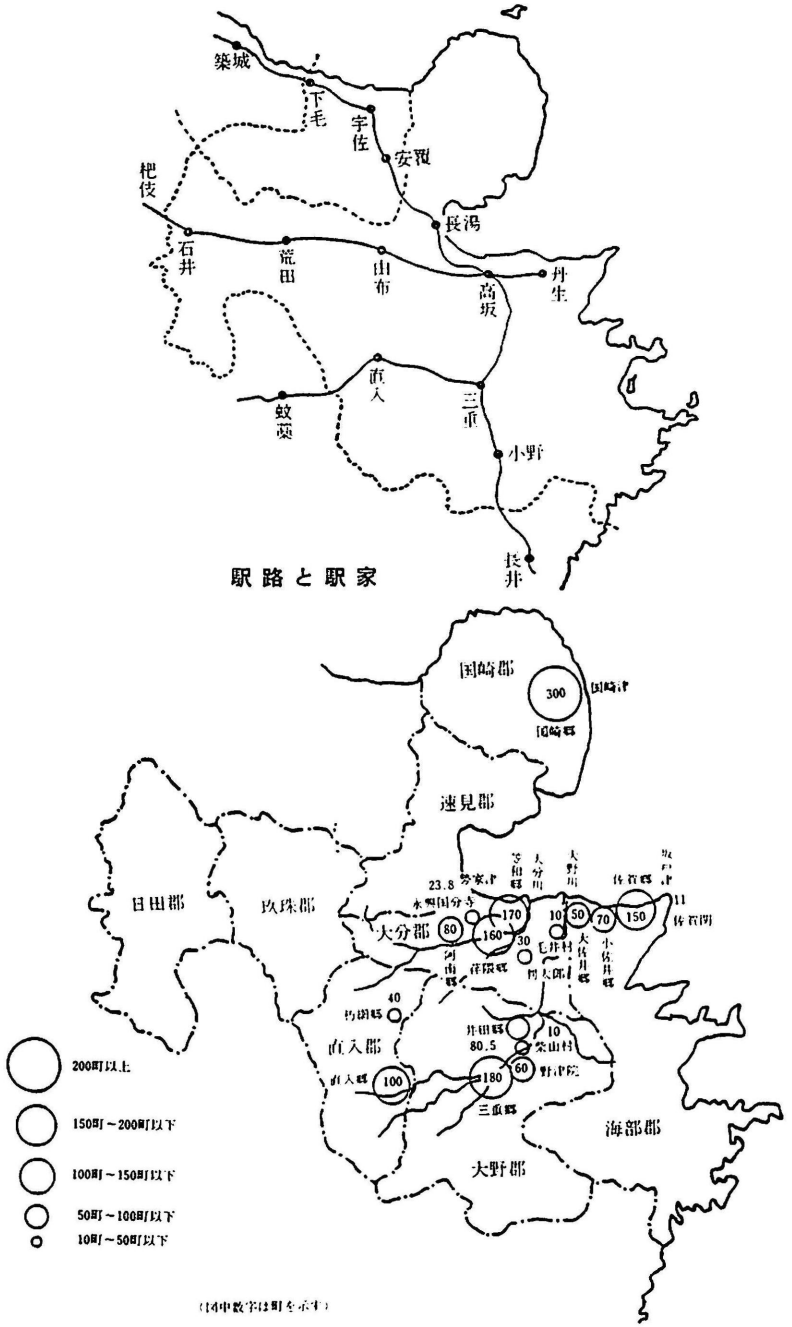
海部地方の主要古墳

1 猫塚古墳　2 馬場古墳　3 築山古墳　4～6 野間 1～3 号墳　7 亀塚古墳
8 城原大蔵古墳　9 臼塚古墳　10下山古墳　11中の原古墳　12飛山横穴群



三重盆地周辺の前方後円墳

1 大塚古墳　2 道、上古墳　3 電政古墳　4 秋葉鬼塚古墳



平安末～鎌倉初期の豊後国国衙領分布図（渡辺澄夫著『豊後大友氏の研究』による）

ある。

その詳しい事は、『大分県史』を読んで頂くことにして、ここでは『大分県史』の図版をお借りしてそのご理解を頂くに留めたい。

第一図の「海部地方の主要古墳」によると、丹生川上流（丹生郷）丹生川下流北部（佐尉郷）、旧神崎村（佐加郷）、臼杵市熊崎川流域（丹生郷）の四グループに密集している。第二図の「三重盆地周辺」は大野川中流部で三重川流域周辺に限定されている。この二図で大野川流域部と、海部地方の古代大和政権と直結した豪族の分布圏がほぼ推定できそうである。

第三図は、古代の交通路で、三重駅は日向道、肥後道の分岐点に当り、古代からの交通の要衝であった。高坂駅から丹生駅への分岐は一見不自然のようだが、これは古代以来国東津と並んで海上交通の門戸であった坂門津を経由して、遠く難波に通ずる主要ルートと考えれば理解できる。

第四図は「平安末～鎌倉初期の国衛領分布図」で、これは斯界の第一人者、渡辺澄夫氏の作図されたものを、前三図と同様『大分県史』からお借りしたものである、それによると、大野川上流の古墳地帯である直入郷（一〇〇町）と中流域の三重郷（一八〇町）、野津院（六〇町）、紫山村（一〇町）、井田郷（八〇・五町）、判太郷（三〇町）、さらに海部郡に入って毛井村（一〇町）、大佐井郷（五〇町）、小佐井郷（七〇町）、佐賀郷（一五〇町）と連なり、国衛のあった大分郡荏隈郷（一六〇町）、阿南郷（八〇町）、笠和郷（一七〇町）、永興国分寺（二三、八町）とも連絡を保っている。これをよく分析すると大野川流域に、肥後と日向。言葉を変えて言えば、九州中南部と中央を結ぶ重要ルートが古代豪族時代から、中世初頭まで長い期間に亘って存在していたのではなかろうかと言う私の持論が成立するのではあるまいか。これは門外漢の私の希望的観測である。こう考えるとこのルート上に、きわめて中央政権に近い「日羅」も、「真名野長者・炭焼小五郎」も、「大神惟基」も説話上の人物として登場した事について理解できると思う。

さて、ここで目を瀬戸内海上に向けて、古代海上交通を展望してみよう、古代中世海上交通について、最も熱心なのは、海

老沢衷氏であろう。すでに『大分県史』上にも多くの論文が折り込まれているが、かつて大分合同新聞紙上に発表された「渡辺澄夫著『源平の雄、緒方三郎惟栄』刊行に寄せて」の一文がもっとも理解しやすいので借用する。

「それでは中世における豊後国の「海上支配権」とはどのようなものであったのか、少し具体的に考えてみたい。この時代の経済を図式的にとらえれば、地方の荘園や公領で生産したものを京都や奈良といった大都市で消費するという一般的な形態であった。このような中で都の人々の食糧の需給関係に大きな影響を及ぼしたのは「鎮西米」すなわち九州で生産された米であった（東国の主要生産品は布、馬など）。この「鎮西米」は海上輸送によって運ばれたが、その大部分は瀬戸内海ルートに拠ったのである。

最近の中世史研究によって肥後国人吉盆地の米は山越えで日向国宮崎平野に出、そこから船で京都に運ばれたことが明らかにされている。当時の舟運能力からすれば何昼夜も一気に帆走することはできない。陸地の影を見失わないように舟を進ませ、津とか泊などといわれる港に随時停泊するのにある。こうして日向を出発した船は何日か後には豊後国の坂門津（佐賀関）に着いた。ここで、万端の準備を整え、風向と潮時を待って速吸瀬戸を横切り、伊予国にわたり、四国の北岸を通るか、あるいはさらに国東津に向かい、山陽道沿いに東進するかの方法をとったのである。

したがって「鎮西米」の多くは豊後国の津や浦を経由して都へ運ばれたことが明らかになる。すなわち、豊後国は「鎮西米の輸送基地的な役割を果たしていたのである。」

さらに、海老沢氏は古代のことにふれ、

「豊後国周辺の海上往還に対する規制は奈良時代（霊亀年間）にさかのぼるが、このことは豊後国衙が早くから海上における国家的秩序を維持する役目を担っていたことを意味する」

と結ばれている。交通の要衝の一つである国東津が国衙領で三〇〇町という豊後最大の規模であるが、一方、坂門津は周辺部を合せれば二八〇町となり、ほぼ同規模である。坂門津の位置については、佐賀関と坂の市の二説があるが、半島の突端部

であるので、夏のマジ（真南の風）、冬のアナジ（北西風）、春のコチ（東又は北西風）など季節風によって、佐賀関、坂の市（細）、臼杵の各港へ寄港したのではあるまいか。したがって私は坂門津は前記三港を含む広い地域であると考えたい。

なお、大野・海部両郡の郡家の所在地は、大野郡家は三重町市場・海部郡家は旧丹生村と推定されているが、これを郡家遺構が考古学的に証明されている前述の熊本県玉名市立願寺に比べると、次の通りになる。

玉名郡家（立願寺）		大野郡家（三重町）		海部郡家（丹生）	
郡衙跡	疋野神社付近		不明		不明
郡倉跡	伝長者屋敷跡約四十棟草葺		不明		不明
郡寺跡	立願寺		不明		不明
郡社跡	疋野神社		不明		不明
条里遺構	有		無		有・丹生・坂の市
山岳	小岱山地		灰立山地		九六位山
鉱山資源	製鉄遺跡		三重郷内各鉱山		真朱（丹生）・砂鉄（金屋）
炭焼伝説	炭焼小五郎		炭焼小五郎		用明天皇
長者伝説	疋野長者		真名野長者		真名野長者
古墳群	小岱山麓		三重周辺		丹生・坂の市・臼杵
津（港）	高瀬津		細長河港		坂門津
駅跡	江田駅		三重駅		丹生駅

つまり、郡家遺構が考古学的に不明であることを除けば三者はほぼ同様の共通点をもっている。丹生（坂門津）玉名（高瀬津）が共に九州中央部の海陸交通の要衝にあり、三重は中九州内陸部の陸上交通の要衝である。しかも肥後、日向から多く

の鉱山資源や、農産物が運ばれてくる三重駅は古代の人々にとって宝の国を見る思いがしたであろう。坂門津から大和、奈良京都への直結ルートを通って政治、経済、文化、宗教が交流したのは当然の成行で、このルートに大野川流域や、臼杵の特異な古代文化が発達したことが予想される。真名野長者伝説、石仏群、寺院群は勿論、祖母岳神婚説話、日羅伝説あるいは遠く松山太山寺、柳井般若寺まで文化交流の輪が広がるのである。今後、早急に望みたいのは、専門家による郡家遺構の発見、発掘調査と、荘園公領制の視点からみた古代、中世史の見直し作業である。これが進展すれば、よりその実態が明らかになるであろう。

七　中世芸能伝播者の役割

――幸若舞・説教節・古浄瑠璃の世界――

豊後の国が中世民間芸能（口唱文学）の中に登場するのは、幸若舞の『百合若大臣』と、同じく幸若舞『烏帽子折』の一挿話に登場する真名野長者である。幸若の百合若を粉本として成立した『百合若説経』をはじめ、歌舞伎でも近松作『百合若大臣野守鏡』などもあって、百合若伝説は全国に伝播した。百合若説話については、朝日長者などもからんで尨大なものとなるので別の機会に譲ることにして、ここでは『烏帽子折』の中の草刈山路説話の伝播者について考察をすすめたい。

さて前述したように幸若舞『烏帽子折』は三段構成から成っており、中段である美濃青墓の宿の長者の口を通じて語られる「草刈笛の由来」は、別の独立した説話を挿入したものといわれる。これは豊後まんの長者の娘、玉世姫と用明天皇の恋物語で、最後はめでたく結ばれて、御子聖徳太子を儲けられるという話であり、同種のものは古浄瑠璃『ようめい天おう』と、さらに戯曲化されたものでは、後世の『用明天皇職人鑑』があるが、私は古浄瑠璃『ようめい天おう』の原型となった唱導文芸、たとえば説教節などが幸若舞曲中の劇中劇となったのではないかという柳田説をとりたい。

さて、この物語の舞台となった美濃青墓宿（現大垣市）だが、ここは東海道の主要宿駅の一つで義経の武勇伝の以外では、

説経節の代表作『小栗判官』の物語にも妻、照手の姫が常陸小萩と称して水仕女となり、三年間を過した宿場として登場している。常陸小萩は夫を慕うて、念仏小萩とも呼ばれたという。ちなみに昔の宿駅の長者は女主人で、宿泊人の世話や、伝馬の継立などのほか、貴人の宿泊に際しては、配下の遊女達を待らせて、歌舞や管絃などで旅情を慰めていたが、とくにこの宿には源義朝の次子朝長の墓のある地で、東海道を東西に流れる念仏比丘尼のたむろしていた処であったという。小栗説話の原型は茨城県小栗地方の大陽寺に寄宿した遊行巫女によって語り出され、それが時宗本山藤沢の遊行寺（清清光寺）に運びこまれて、学僧らの手によって物語的に発展成長し熊野信仰を中心とした唱導文学が完成したものといわれているが、その最後の管理育成者が、青墓の宿の念仏比丘尼であったとする説が有力である。青墓の近くの垂井町には時宗の有力寺院の金蓮寺があり、美濃一の宮であり、金山彦を祭神とする鉱山の神、春宮大社も同町内に鎮座する。ところでこのような古浄瑠璃や、古説経の担い手は、高野聖、回国聖、山伏、御師、盲僧、絵解法師のほか、熊野比丘尼など巫女の類といった下級宗教家だったが中でも遊行を教義の中心とした時宗聖の関与が大きく、全国の宿や津、社寺などにたむろして霊顕譚や、武士・高僧の遺跡などをわかり易く解いて教線をのばしたのである。彼等の足跡のあとには、絵巻、縁起、蓮歌をはじめ全国に多くの供養塔などを残したのはそのためといわれる。

さて、もともと『烏帽子折』は美濃青墓の宿での、義経の元服、加冠に次ぐ初手柄という人生の門出を祝っての説話だが、これは例えば、『お伽草子』の「文正草子」の塩売文太出世説話と同様のいわゆる〝祝儀物〟であり、義経の将来の出世を暗示して、さまざまの人の手によって付け加えられたものであろうが、あるいは判官びいきも作者の心情の上で作用して、幸若舞としては珍らしい三段構成という複雑なものとなったのかも知れない。

一方、同時期に唱導文芸の一つとして盛行した古浄瑠璃『ようめい天おう』も江戸の初中期まで、もてはやされ、民衆の支持を得たらしく、井原西鶴の『男色大鑑』（巻二）でも、主人公の三之丞が連歌師の紹巴の庵の跡を尋ねたとき。

「小者集りて、二文四文に読みうたうなど、扇拍子に声を惜しまず、「むかし用明天皇は、玉代の姫を恋ひわびて」

と語るものあり、又は宇和の郡の魚焼くかをり、「いかに下々なればとて、主の別れを知らざるや」

とあって西鶴当時でも民衆の間では大いに流行していたこと証拠づけている。

ところでこうした語り物や、唱導文芸、芸能の伝播者であった遊行聖の活動は、わが豊後や肥後でも可成り盛んであった痕跡が見られる。肥後玉名の高瀬津には正平四年（一三四九）に遊行五世安国が時宗願行寺を開山し、遊行聖や念仏比丘尼が参集した。古浄瑠璃『安口判官』には「高瀬浦」の「九州に隠れなき人あき人」として人買源九郎が登場するが、これらも聖たちの唱導が原点であろう。

豊後も時宗王国であった薩摩・日向の隣国の関係もあって遊行上人の廻国が盛んだったらしく、「時宗血脈相続之次第」（『時宗の成立と展開』（大橋俊雄・吉川弘文館）によると、

○廿四代遊行上人其阿が大永六年五月、豊後国西教寺で入滅。

○廿八代上人が天文十七年三月、豊後国府称明寺で賦算。天文十九年八月、豊州廿日市で入滅。

とあるが、前者の西教寺は坂の市と学界での指適があるが、その遺構は不明である。当時の遊行は一行二、三百人が時宗一山をあげての廻国であり、即身成仏の賦算を受けるため、毎日何百、何千の人が雲集したというから相当規模の大寺院であった筈である。時宗は江戸時代にはいると、檀家制度の確立や、佐竹事件の連座などで宗勢が著しく衰微したが、その反面、地方では、下層社会に浸入して、中世以来の諸芸能や、口承文芸の世界に大きく飛躍、発展、現在の民俗芸能の面でも数多くの伝統文化を残してきた。

江戸時代中期に根拠地の役割を果したのが豊後では次の各時宗寺院である。

『時宗末寺帳』（藤井学・近世仏教二号）。称名寺（国府）、安養寺（関、尼）・専称寺（佐伯）、松寿寺（鉄輪）四ケ寺。

坂の市の西教寺は江戸時代にはすでに転派、又は廃寺となっていたようである。ここで一つ疑問に思うのは物々交換市で有名な万弘寺の存在である。

『日本古寺事典』によれば、

万弘寺　大分県坂の市、臨済宗妙心寺派、（開基）用明天皇、（開基年代）用明天皇時代、（伝説）天皇が真名野長者を訪ねたとき、腰かけた石が境内にある。

とあり、天皇が上陸されたと伝える王ノ瀬を、はじめ、夜明城、お化粧水、大内、京畑など坂ノ市から戸次方面へかけて残る三十近い用明天皇伝説『大分の伝説』（梅木秀徳氏）の中心的存在となっている。古刹と伝える万弘寺が『大宰管内志』や『豊後国志』に記載されていない事から推定すると、廃絶した西教寺の遺構の一つが万弘寺として残り、市寺的存在として古くからの物々交換市と共に、用明天皇伝説を残したのでないかと仮説をたてたい。戦国末以来からの臼杵や、鶴崎の繁栄のため、往年の交通の要衝、坂門津は、丹生、佐尉、佐賀三郷と共に、わずかに〝万弘の市〟〝佐野の市〟〝志生木の市〟の三つの古代の市の名残りを残して亡び去ったのであろう。同時に西教寺にたむろした中世口唱文芸、芸能の伝播者も消え去った。その遺構すら探り得ないのはさびしいかぎりである。

八　まとめ

以上七章に亘って、炭焼小五郎と真名野長者について述べた。炭焼小五郎説話は「ものぐさ太郎」タイプに属し、愚鈍な若者が賢い女房をめとる事によって長者になるというもの。これが少し複雑に展開してくると多くの場合、後におごりが長じて没落し、主として観音信仰の霊顕譚を伴うか、或は埋蔵金伝説が加わってくる。さきに添付した「分析表」のほぼ前段の部分である。熊本県玉名市立願寺、疋野長者説話は、玉名郡司日置氏の小岱山鉱山開発による繁栄と、その後の社会機構の変革による没落を暗示し、玉名温泉の発見や、立願寺の建立、郡倉跡推定地を長者屋敷伝説地とするなど実像にきわめて近いし、付近の菊鹿地方には、米倉長者、駄の原長者、焼米長者など郡家、郡倉にからんだ長者遺跡地が多い。大野郡三重町の炭焼小五郎は「黄金のおかげで夫婦になって、大いに富み栄え、三年目には三千人の家来と五十七ケ所に家や倉が建ち並んだ」とあり

そこで一応前段が終るが、その実在性はきわめて乏しいのである。しいて言えば古代大野郡司として定着した誰かが、鉱山開発によって勢力を得て炭焼長者説話のモデルになったという外は考えられない。その実像を解明するには、玉名の例の如く郡家遺構の発掘が第一の条件であろう。

中段の真名野長者の部分は、幸若舞『烏帽子折』の影響を受けた部分で、物語は「絵姿女房」「三度の難題」「草刈山路」「流鏑馬の神事」「姫との婚姻」と中世口承文芸の酔を集めて続くが、この時点ですでに『烏帽子折』と『真名野長者説話』の間では重大な相違点が生じている。第一の長者の名称が「烏帽子折」では、「筑紫豊後内山の長者まの殿」だが、長者説話では「真名野長者」であり、姫の名も「玉世姫」が「般若姫」と変化する。次は流鏑馬の場所が「宇佐八幡放生会」が「三重の松原、笠掛の的」となり、最後の最も重要なことは「用明天皇が玉世姫を伴い還御、聖徳太子を儲けられて、我が朝に仏法を弘めさせ給うなり。玉世の姫は正観音、用明天皇は阿弥陀如来の化身、聖徳太子救世観音の権現なり。用明天皇恋故遊ばす笛をこそ、草刈笛と申すなれ、知らぬ事をば、我御前達笑わぬ事であるぞよと。」唱導文芸の形式をそのまま伝えている。長者の姫の出世譚が「真名野長者説話」では後段と続く般若姫遭難悲劇へ転回するため、中段では玉絵姫安産で終ることに注目せねばならない。

さらに「烏帽子折」では、終始、用明天皇であるが、長者説話では、橘豊日の皇子が後に用明天皇と変ってくる。この豊日や豊国法師を豊後と用明天皇との関係を解決するカギとする学者もあるが、何れにしても、『烏帽子折』や古浄瑠璃『ようめい天おう』が相当民衆の間に浸透・定着してからの成立であることが伺える。最後の後段部分は、中世以来の口承文芸、芸能の全く影響を受けない寺社の成立縁起で、夫を慕いながら若くして逝った、般若姫供養が主体となっており、さらに草刈家の家譜の成立を計っているのである。そのため、家譜によればその後、連綿として家系が続き隆昌繁栄している筈にもかかわらず、草刈家本処の臼杵深田において、長者の没落を意味する「朝日さす、夕日輝く」というおきまりの埋蔵金伝説が存在するなど多くの矛盾が生じてきたが、それも実に手際よくまとめられて、般若姫の娘、玉絵姫説話は遠く、山口県萩市の玉江観音

の創建にまで波及しているのである。

以上、述べてきたように、炭焼小五郎・真名野長者は決して九州の山里の特定の実在した人物の事蹟ではない。用明天皇、聖徳太子、都の貴族まで登場する物語の中には、古代国司・郡司は勿論、古代・中世武士団、鉱山師集団、海運業者、僧侶石工集団、あるいは豪商、豪農、宿の長者など、大野川流域や、海部地方を舞台に長い年月に亘って活躍した多くの人達の虚像と実像の点滅である。それは豊の国といわれたこの地で、山の民、野の民、川の民、海の民の奏でた壮大なロマンの結集と言うべきであろう。また、この物語りを編んだすぐれた[illegible]僧の存在も忘れてはならない。

〈追記Ⅰ〉

幸若舞「烏帽子折」の中に登場する、宇佐八幡の八月十五日、放生会におけるヤブサメ神事をとって、宇佐信仰と炭焼小五郎、真名野長者説話を結びつける人が古今あとを絶たないが、幸若舞や、謡曲、説教節、古浄瑠璃等中世芸能や、唱導文芸には、宇佐・熊野・鹿島・香取・春日・熱田・清水・北野・弥彦等各国・各地の寺社の登場が多く、とくに判官物、源平物と呼ばれる曲目には源氏の氏神が八幡であることから、宇佐だけでなく、岩清水、鶴ケ岡まで数多く登場する。長者伝説では「三重の松原笠の的」と変化する例などからみて、これを短絡的に宇佐八幡信仰と結びつけるのは如何であろうか。ご一考をわずらわしたい。（お伽草子になると「御曹子島渡り」など異国の神々まで出現する。）

〈追記Ⅱ〉

犬飼の対岸、吐合港は、藩政時代は、三重の細長港と共に、臼杵藩の物資集産港であったが、産物の主なものとして、石灰、鉱石、鍛冶炭があげられているのは注目に与いする。

[illegible]・鶴見山寺）